佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
〒840－0041 佐賀市城内1丁目15－23 TEL.0952－24－3947 FAX.0952－25－7006

佐賀新聞 2010(平成22)年7月31日(土) 県内文化欄 文化時評2010 【美術】

県内文化

美術

美の教師たちの足跡

野中 耕介

先日開催された「第一回佐賀県高等学校教育研究会芸術部会美術部会」の研修会（於県立美術館）の席上、参加された先生方に「明治時代の佐賀にどんな美術の先生がいたか」についてお話をしたところ、一堂目を丸くされ「そんな昔のこと、どうやって調べるのですか？」と驚かれつつ、さらに一言。「そもそも、なぜそんなことを知りたがるのですか？」

本欄でもたびたび言及しているが、佐賀県の美術（図画）教育と教師のことは、私の最大の関心事のひとつである。なぜなら人間の美的な感覚、感性、美への視線は、ある時こつ然とわき出してくるものではなく、それは育まれた（る）ものであり、その機会の筆頭として、学校における美術（図画）教育があり続けていると強く信じているからである。そして、美の感性は美術作品の表現を方向づけ、決定づける。美術教育史と美術史は不可分な関係にある。

明治時代から現代まで、県内にどんな美術（図画）の先生がいて、生徒に何をどう教えたのか。このことについては、県立美術館でも独自に調査を続けていたが、現在、茨城大学の金子一夫氏による詳細な調査により、全国各県の美術（図画）教師の人名と経歴が次第に明らかにされつつある（私の講義も、実は金子氏の研究成果に多くをよったものであった）。

それによれば、県内の旧制中学と師範学校だけでも、明治元～末年までに50人以上の美術（図画）教師（図画担当であったと予測される人も含む）が勤務したことが判明しており、例えば、そのうち洋画を専門的に学んだ教師は9人ほどを数えることができる。

さらにその中の鶴清気（佐賀中学。長崎と京都で洋画を独学）、森三美（佐賀中学。青木繁の幼少時の師）、伊達孝太郎（小城中学勤務後アメリカに留学）、平島信（小城中学。青木繁と画塾不同舎の同門）らは、現在も自作が残っている。かれらの存在と作品をとおして、佐賀県の洋画（あるいは洋画的）教育の普及と展開、さらに画家として生徒たちに与えた影響が想像できるのである。

研修で美術教育史の奥深さに瞠目した現在の美術教師の方々も、遠い未来、おそらくは誰かに歴史の一部として「調べられる」ことになるのだろう。そして、これだけはっきりといえる。私が今も飽くことなく美の問題について学び、考えることができるのは、私が習った美術教師の方々が、私に美術の魅力を、情熱をもって教えてくれたおかげである。

（県立美術館学芸員）

文化時評 2010